



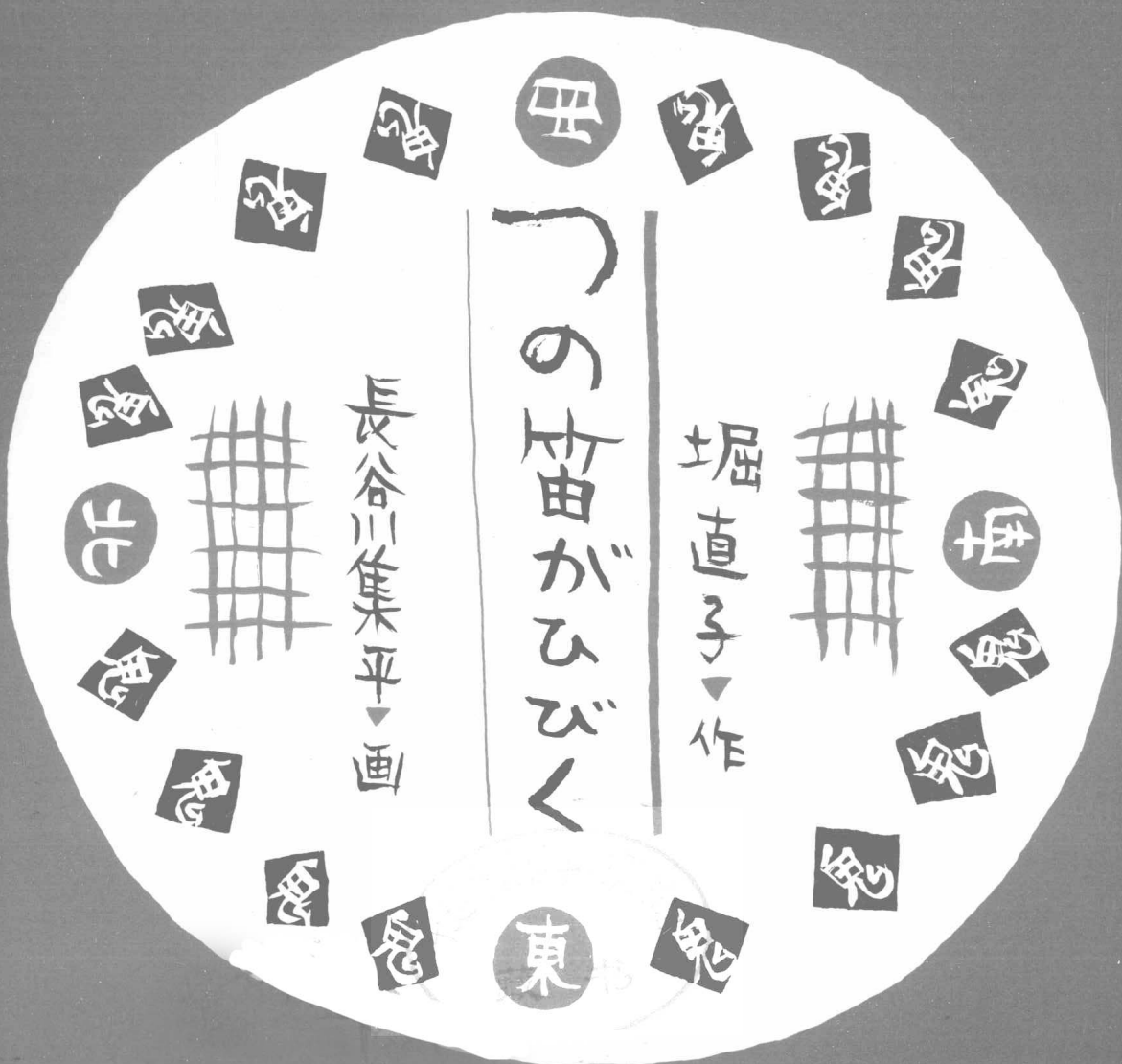
The background of the cover features two stylized, abstract figures. On the left, a blue figure with a textured, scale-like surface is crouching. On the right, a larger black figure with a similar texture is also crouching. Both figures have large, white, claw-like hands. Above the black figure's head, there is a stylized flame or smoke element in blue and orange. The central title box is a vertical rectangle with a yellow background and a dark border.

つ の 笛 が ひ び く

堀直子 ◆ 作

長谷川集平 ◆ 画

● 童心社 ●



*本文一二五ページの詩は「わかれる昼に」——立原道造詩集『萱草わづなに寄す』より引用

つの笛がひびく

昭和五十七年四月二十日 第一刷発行

著者——堀 直子◎

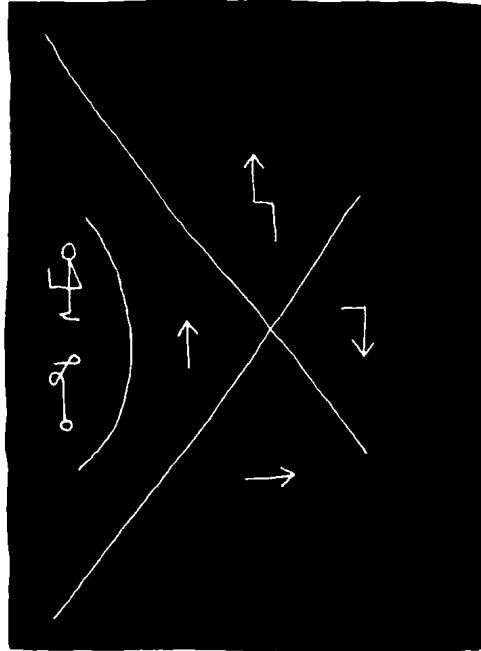
画家——長谷川集平◎

発行所——株式会社 童心社

東京都新宿区三栄町二二
電話〇三(三三七)四一八一

活版——新興印刷製本株式会社
平版——小宮山印刷株式会社
製本——株式会社 難波製本

もくじ



第一章	闇の中で	8
1	祖父 ^{そふ} の家の秘密 ^{ひみつ}	8
2	闇 ^{あん} の宴会 ^{かい}	19
3	四本指	29
第二章	消えない夢	
1	地底 ^{ちてい} からの声	38
2	夜のへ呑 ^の んべえ	47
第三章	黒 ^{くろ} い炎 ^{えん}	
1	泳 ^{およ} いだ後に	58
2	父 ^{ちち} たち母 ^{はは} たち	65
3	テストの部屋	72
第四章	つきまとうもの	

1 なぐられた草 80

2 病室にて 88

第五章 光る牙^{きば}

1 章の小指 98

2 踊る夜^{おど} 108

3 三Dのけもの 120

第六章 火の夜のつの笛^{ふえ}

1 ほら穴の鬼^{おに} 134

2 燃える^も 145

3 雪に叫んで^{きけ} 161

あとがき 人として――

著者：堀 直子（ほり なおこ）

1953年7月高崎に生まれる。日本児童文学者協会会員。大学在学中から、現代に生きる思春期の少年少女たちの心の痛みを追いつづけた児童文学の創作にとりくんできた。第一作「おれたちのはばたきを聞け」（童心社）で第14回日本児童文学者協会新人賞受賞。

画家：長谷川集平（はせがわ しゅうへい）

1955年4月姫路に生まれる。絵本「はせがわくんきらいや」で第3回創作えほん新人賞優秀賞受賞。「とんぼとりの日々」「トリゴラス」「たかし、たかし」「おさむ、ムクショ」「日曜日の歌」「7月12日」等、絵本やさし絵作品多数。

つの笛がひびく

𠂇フ 𠂇山 𠂇手 𠂇

大 大 陽 火 天 𠂇 山 主

第一章

闇やみの中で

退	退	退
退		退

鬼
急
急
如
律
令

1 祖父の家の秘密

六月下旬の土曜日の午後。

おれは、南浦和駅の改札口で、佐久間陽を待っていた。陽ってヤツはおれのダチ公で、二人とも保里中の三年D組さ。

おれは、水着の女の子のポスターがはられた木の壁によりかかって、赤いシャツの胸ポケットから、タバコを一本ぬいた。百円ライターでシュパツと火をつけた。

せいぜい五つは年上に見られるって感じで、親指と人さし指にはさんで吸っていると、いとこの日高章に、ぼったり出くわしたんだ。

「ヘーイ。」

おれは、青い煙をたつぷりと、章の顔めがけてはきつけてやった。章のヤツ、おおげさにむせた。「タバコは、頭を悪くするか？ ノウ。タバコは頭をよくするんだぜ。アキ。」

おれは、章がこれから弘文塾へ行くんだろうと思った。弘文塾は、埼玉県下の進学塾の中でも最高のエリート塾だ。弘文塾で百番以内に入れば、偏差値70以上の名門高校でも、合格まちがいなしってんだからね。

「ジン。」

章は、一歩だけおれに近づいた。

「知ってるよ、ぼくは。」

「なにが……。」

おれは、そっぽを向いた。

「無断外泊^{むだんがいぱく}しに行くんだらう。小川町にある、死んだおじいさんの家にさ。」

おれは、だまっていた。

「ハハ、凶星だね、ハハ。」

章は、さもおかしそうに笑^{わら}った。

「おまえんとこのお婆さんが、こぼしてたよ。土曜日になると、ジンは佐久間くんとこで勉強^{てんぎやう}するからって、毎週泊^{とま}りに行っちゃうのよ。ほんとうかしらねえ？　ってさ。あいづらが徹夜^{てつや}で勉強^{てんぎやう}だつて！　ぼくはピーンときたよ。ああ、あいづら、またワルサしてるんだつてね。おじいさんところは空き家だから、おおかたそこを使ってワルサしてんじゃないだらうかとね。あたったね。」

おれは、まっ赤なスニーカーの足もとに、タバコの灰^{はい}をトントンこぼした。

「へーえ、それで、なに、おふくろに、告げ口でもしようつていうの？」

おれは、章の顔^{つら}をじっと見つめた。

「せこいじゃん、アキ。」

「ハハ、ハハハハハ。」

章は、また唇^{くちびる}だけで笑った。

「じょうだんじゃないよ。きみら親子のケンカに首をつっこむほど、ぼくはひま人じゃないよ。そ

んな時間があつたら、英単語のひとつでも覚えるさ、ハハ。」

章は、笑い声を残して、ホームの階段を足早に上がっていった。

チェツ、言ってくれるよ。

おれは、ズックのつま先で、タバコをらんぼうにもみ消した。

おれのじいさん、日高幸介は、三か月前に脳出血で死んだ。七十四歳でね。死ぬ二日前まで元気だったと、じいさんが役員をしていた農協の連中たちは、しゃべっていたつけ。

ばあさんも五年前に死に、じいさんはずっと、小川町の家でひとりぐらしをしていた。

おれが陽と二人して、武蔵野線と東武東上線を乗りついで行く、そのじいさんの家というのは、なにしろ、天保年間（一八三〇〜一八四四）に建てられたとかいうしろものだった。

長年の間、じいさんがコツコツと集めてきた、江戸時代からの民族資料や古文書や生活用品は、小川町の教育委員会が引き取ってひとまず管理してくれていたし、家の中は何にもなく、ただがらんとだっただけだった。

そのだれも住む者のいないじいさんの家を、おれと陽は、親たちにはないしよで、土曜日から日曜日にかけて、一晩中こっそりと借りきっていたのだ。

だって、土曜日の晩だぜ。

勉強勉強テストテストで、ふらふらになった心とからだをシャンとさせ、楽しさをいっぱい充電するときだぜ。一週間分のいやなことを、いっきに忘れさせてくれる土曜の晩に、眠るのなんて、

もったいない。だれにもじゃまされない自分たちだけの家で、日曜の朝まで、好きなことをするんだ。自由は、いっぱいころがっている。

おれたちは、土曜日の晩が、待ちどおしくてならなかった。

ところが三週間ぐらい前、おれのおじさんがへんなことを言った。おじさんは、おれのおやじのたった一人の兄きで、章の父親だ。

——おじいさんが集めた貴重な民族資料を、展示したらどうだろうか？

もっともそれは、教育委員会からの提案だったらしいが、数千点にものぼる品数を展示するだけの広い場所が見あたらなかった。

それで思いきって、おじさんが、じいさんの家の母屋を改造しようと言い出した。おじさんは、おれのおやじを説得し、さっそく七月から、母屋の改造工事に取りかかろうと計画していた。

ということは、おれたちにとって、これが最後のサタデーナイト・フィーバーになるかもしれない。自分たちの唯一心はずむ時間が奪われるのは、まったくしゃくの種だ。だからこそおれは、最後の夜をせいっぱい楽しみたいと思った。

「ジーン、ジーン。」

佐久間陽が、でっかい声を出して呼んだ。

ジーン、ジーンって、まるでセミみたいだな、おれ。

陽は、息せき切って走ってきた。

「ワリイ、ワリイ、おそくなっちゃった。」

陽はしきりにあやまった。

パーマのとれかかった髪が乱れて、火がついたようにぼわっと広がっていた。

陽は、やせているわりには、目のぼつちりしたまん丸い女の子みたいな顔をしているんだ。学生服を脱いで、さらっとした木綿のシャツと幅広のスラックスに着がえると、かえって幼く見えるのが、これまた不思議なんだな。

「ワリイな、ジン。おやじをだますのに、手間取っちゃった。ジンとこで徹夜で受験勉強するんだって手は、もう、あのおやじにはきかないよ。あせっちゃった。でも、これ。」

陽は、おれの鼻先へ茶色い紙袋の口からニュッと中のものを見せて、ぴんと指ではじいた。

「ジャーン。ウイスキーだよ。うちの店からくすねてきた。おれの差し入れ。」

ヒューイ。おれは口笛吹いた。

おれたちは武蔵野線のホームに、ゆつたりと入ってきた電車で飛び乗った。

秩父連山が、緑の山肌をくつきりと空へ盛りあげていた。

おれと陽は、じいさんの家につづく、くわ畑の中の坂道をのぼった。梅雨の晴れ間の日ざしが、かっと暑かった。くわ畑に反射した光が坂道にこぼれて、この坂は、なんて言ったらいいのか、ちようど天まで続く白い一本の帯のようだったんだ。

あんまりまぶしいんで、おれは、くらっと目まいがした。

タツ、タツ、ハッ、ハッ。

汗^{あせ}かいてのぼりきると、くり林の奥^{おく}に、かやぶき屋根を赤いトタン板でおおった、じいさんの家が見えてきた。

——あれえつ、おじん？

おれは、はっと目をこすった。

幸介^{こうすけ}じいさんが、光の中に腕組^{うでぐみ}みしてつつ立っているじゃないか。ぴーんと背中^{せなか}を伸ばしてき。小さいけれど、腰^{こし}はまがらず、白いごま塩頭のじいさんが、笑いながら、朽^くちた門のそばにつ立^たってんの。歯^はのない口が桃色^{ももいろ}にぬれて、大きく開いていた。

——おじん？ なに、笑ってんの？

ひとかかえもある庭のモクセイが、幹^{みき}のところからいくつにも枝^{えだ}わかれして、高く高く伸び、太り、葉をうわんと茂^{しげ}らせ、光を葉っぱのすき間からまきちらしていた。

まきちらした光の粒^{つぶ}が、じいさんのからだをとりかこんで、おれは、目をあけていられないくらいまぶしかった。

「おじん！」

叫^{さけ}んだら、光がパシパシ碎^{くだ}けて、すっとじいさんが消えた。

「どうしたんだよお、ジン？」

陽^{しんみょう}が神妙な顔をして、おれをのぞきこんだ。

「どうしたのさ？ まるで、キツネにつままれたような顔してさ。」

陽のやつ、おれのまん前で両手をふって、反応を確かめている。

「……おじんがさ、ほら、そこに、ぼうっとつつ立ってんだよ。」

陽は、おれの指さす方を見つめて、ひっひっひと笑った。

「いやだね。死んだ人がいるはずないだろ。」

おれは、目を何度もパチクリして、頭の後ろをコンコンたたいてみた。

「おれの錯覚かあ——。」

「あつたりまえ。」

首をかしげながらモクセイの木の影に入ると、ぼっと日ざしが遠のいて、おれも陽も、髪もてのひらも緑色にそまった。

モクセイの木の根もとには、赤い屋根の屋敷神がまつられてあった。よくよく見ると、屋敷神は、正面の入り口に段だんがあつて、朱塗りのはげた小さな鳥居をくつつけていた。鳥居の奥は本殿だ、といつか死んだじいさんが言っていた。

本殿は、家を災いから守る神様を、しまっておく部屋みたいなもんだ。でも、長いこと雨や風、日の光にさらされて、本殿はいまにもくずれ落ちそうだった。ななめにかしいでいて、赤い色もはげ落ちて、神様も逃げだしたくなるんじゃないかと思うほど、オンボロだった。

屋敷神の前には、石でできた二頭の狛犬が、草ぼうぼうの地面から、おっかない顔をして、こつちをにらんでいた。狛犬のからだは苔だらけだった。ざらざらによごれ、たてがみなんか、うずまきの形がすりきれて、なんともみすばらしかった。